

# ああ、相談業務

## ～弥生ちゃんの話～

7

かうんせりんぐるうむ かかし

河岸由里子（公認心理師/臨床心理士）

### 弥生さん家族

弥生さんの家族構成は、弥生さん 33 歳、夫 41 歳、長男 4 歳、長女 1 歳の四大家族。弥生さんは専業主婦、夫は会社員、長男と長女は集団には入っていなかった。家は、民間のアパートで、夫の転勤に伴い道東から転勤してきた。

### 相談の始まり

弥生さんと関わるようになったのは、保健師さんの連絡からである。転入でもあり、下の子の検診の案内ということで母親と話したときに、長男も 3 歳児検診を受けておらず、母親の様子も、長男の様子も気になったということで、家庭児童相談員につないだということであった。

保健師に言われて、相談窓口にいらした弥生さんは、1 歳の長女を負いひもで背負い、長男にアレコレ大声で注意をしており、疲れ切った表情であった。

まずは相談室でお話を聴くことにした。

### この家庭の情報

弥生さんご自身は 3 人兄弟の真ん中で、お兄さんと弟がいて、それぞれ遠方で働いているようだが、連絡も取っていないとのことだった。父母も遠方に住んで二人とも働いているが、弥生さんは父母との関係を断っており、連絡を取っていないそうだ。三人兄弟の中で、「女の子であることで、ひどい扱いを受けていた」ということであった。家の中の事を手伝わされたが、上手くできなくて、度々母親にどやされたり叩かれたりしていたという。高校も行かせてもらえず、家の手伝いを叩かれながらやらされることに耐えられず、19 の時に家出をして、最初は水商売で働こうとしたがうまくいかず、路頭に迷っていた時に、親切的な食堂で住み込みバイトとして雇ってもらった。前時代的であるが、地域によっては男子ばかりが大事にされ、女子は家事手伝いとしか扱われないという家が、まだある。弥生さんの実家もど

うもそういう家のようなだった。

夫とは、弥生さんが食堂でアルバイトをしていた時に知り合って付き合い、すぐ妊娠したため結婚した。夫は本州の出身で、兄弟が沢山いるらしいが、よく知らないとのこと。夫方の両親は本州で健在だが、結婚のときも会っていない。どうやら結婚に反対だったらしい。それでも孫が生まれる時は、夫が両親に伝えたようで、産後の扱いに義母が来て一週間ほどいてくれた。長女の出産時も、手伝いに来てくれたそうだ。弥生さんは義母が来てくれたことが嬉しかったと言っていた。ご飯を作ってもらえるだけでも助かったし、二人目を出産した時は、長男の対応が大変で、義母の存在は大きかったと話していた。

夫は朝 6 時半に出て帰宅は 20 時過ぎ。土日は休みだが、休みの日はほとんど寝ているか、パチンコに出かけるなどで、家事、育児の協力はあまり得られないとのことであった。

## 相談経過

面談を通じて、弥生さんの知的な問題と、夫の対応、そして弥生さん自身の壮絶な過去がわかってきた。

弥生さんの話では、夫は暴言がひどく、暴力も振るってくるという。昨日も背中を殴られたというので、相談室で背中を見せてもらった。すると、殴られた痣が一つあるにはあったが、それよりも、細長い跡が腰のあたりに何本もあるのが目立った。それは新しい傷ではなく、焦げ茶色に変色した、古い傷跡であった。

殴られた跡は少し赤くなっている感じで、DV の証拠である。しかし、古い傷は何なのかと聞いてみると、子どものころおねしょやおもらしのたびに、焼き火鉢を充てられたと言っていた。つまり折檻の跡である。今であれば虐待で保護されたであろう人である。

なぜ夫に殴られることになったのかを確認すると、料理が出来ないことを責められたことから喧嘩になったという。子どもが二人いて、一人で大変なのだろうなと思っていたため、そういう意味で料理が手抜きになっているのかなと聞いてみると、そうではなく、分量を上手く図ることができないため、カレーだと 1 週間分になるほど大鍋でたっぷり作ってしまい、その結果余ったものが腐ってしまうとのことであった。

子どもたちの食事も、作るというより買ってくる形で、夫にしてみれば、家事もろくにできないし、お金の使い方も無駄遣いが多く腹が立つという事のようにであった。弥生さんは自分が悪いのだがと言いつつ、できないものは仕方がないと居直っている。

子どもたちはといえば、長男は多動で指示が通りづらかったので発達検査を勧めた。長女についてはまだ小さいので、今のところ大きな発達の問題はなさそうである。弥生さん自身も長男の扱いに困っていたこともあり、発達検査を受けることは直ぐに承諾したので、予約を調整した。おそらく、しっかり養育されてこなかったからではと思ったが、発達検査を受けておくと安心である。今までどうして検診などを受けてこなかったのかを尋ねると、「面倒だったから」と話していた。

弥生さんについては、どうしたいかを確認すると、子育ても、家事もしたくないという。責められたり殴られたりするのでは、夫とも離れたいと。シェルターに逃げることもできるが、子どもたちを置いていくわけにはいかない。当時は夫婦喧嘩で暴力があったとしても、子どもたちの保護には至っていなかった。

さて、どうするか？実家に帰ることを提案しても、弥生さんはかたくなに拒否をした。実家の両親との関係が悪いのは、背中の傷からもなんとなく納得できた。「旦那様と話したい」と伝え、それは構わないというので、夫と話をすることにした。行先などが決まるまでど

うするかと尋ねると、それまでは家で何とか頑張るといふ。カレーを作ったら毎日一回は火を入れないとすぐにいたむなど、伝えられることを伝えて、何かあったらすぐ連絡をもらうよう伝えて、一度家に帰ってもらった。

数日後、夫に来てもらって話を聞いた。夫からは、子どもが一人の時は、まだ何とか夫が手伝うことでできたこともあったが、二人になってからは、家を片付けない、子どもたちの躰もできない、食事も作らない、作れるものが限られていて、カレー、シチュー、鍋くらいで、用意した野菜をすべて使い切るので、量が半端ない、その結果半分は腐らせて捨てることになるとのこと。結婚したは良いが、妻としても母親としても落第なので、離婚して子どもたちは引き取りたいと話していた。叩いたり暴言を吐いたりすることについては反省していたが、我慢しきれないのだと。

双方の話を聴くと、弥生さんは子育ても家事もしたくない、夫と別れたいと言っているし、夫は弥生さんと別れて、子どもたちを引き取りたいと言っているので、争いはないわけである。

弥生さんは子どもたちと別れて大丈夫なのか？支援を入れて一緒に過ごすことは考えないか？家族としてこのままの形を維持できないか？何度も確認した。夫にも、何とか今の形を続けることは無理なのかを確認した。しかし二人の意志は強かった。そうであるなら、夫は子どもたちを引き取って、どのように子育てをするのか、育てられるのかという点が問題となるし、弥生さんについては、一人になってやっていけるのかという問題がある。夫には子育てについての計画を考えてきてもらうこととし、弥生さんについては、知的レベルの確認をした方が良いのではと思い、総合相談所で検査を受けるということを提案した。

その後の数回の面談の中で、長男には発達障がい診断がつき、妹と二人を父方実家で祖父母が育てるとの案が浮上、弥生さんもこれを納得した。弥生さんについては、検査の結果

IQ52で、医師の診断も受けて、知的障害者として年金の申請をし、障がい者としてグループホームに入り、福祉制度の中で生きていくこととなった。

## まとめ

このケースはかなり前の時代背景での話だが、今このケースが相談に上がったらどういう形になるだろうか。まずは夫のDVということで、大抵は妻が警察を呼ぶだろう。この程度では逮捕まではいかないものの、子どもたちが面前DVで児童相談所に通告されるだろう。家庭児童相談員と児童相談所職員が訪問し、児童の安全を確認する。夫婦の話を聴く中で、今回と同様に子どもの発達検査の話が出るだろう。母子がシェルターや女性援助センターに避難するかもしれない。母親の知的問題にも気づいて、同様に検査となるだろうし、夫婦が今後どうするのか、子どもたちをどうするか、それからの流れはあまり変わらないかもしれない。調停で話し合いなさいとなるのかもしれない。できればいろいろな支援を入れて、何とか家族の形を維持できないかという話もするであろう。知的障害があれば、ヘルパーの活用、保育所の活用、料理についてもヘルパーと一緒に作ることで学べることもあるだろう。家族がそのまま暮らせたなら子どもたちにとっては一番である。

子どもたちと母親が離れなければならないというのは、望ましい形ではない。知的な問題を抱えながらも一生懸命子育てをしてきた母親の努力は認めるべきだし、何か支援を入れて、家族が家族として成り立つように支援するのが本来の支援だと思うのだが、このケースでは結局、母子を引き裂く形になってしまったのが残念であった。